

---

# 暖かい魔法

うだる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暖かい魔法

### 【Nコード】

N7253R

### 【作者名】

うだる

### 【あらすじ】

夜のバス停でのちょっとした出会い、としかかけません。

## （前書き）

いたって普通の、至らない事の多い文章かと思いますが。

2月も終わりに近いのに、夜の風はいまだに冷たい。昨日はあんなに暖かったのに、今日はまるで雪でも振るんじゃないかと思うほどに寒い。

バス停で待つ私に時折吹き付ける風が痛いくらいに冷たく、外部にさらされた顔や耳を容赦なく冷やす。これだけ寒いと実家を思い出す。森田美紀の実家は田舎というほど田舎ではなかったが、都会と言うにはちよつと寂しい、そんな街だった。

向こうの冬は更に寒く、よく雪が積もっていた。

そんな所に住んでいたのに、すっかり体が感覚を忘れたのか、都会だというのに実家より寒いと感じていた。かさねてこの薄着ではしようなないのかもしれない。昨日が暖かく、今朝も心地よい暖かさを保っていたのに、夕方から夜にかけてがぐんと気温が下がった。

油断した、としか言いようがなかった。今朝何気なく掛けてきたコートが愛おしい。抱きしめてあげたい。

携帯を開き時刻を確認する。それからバス停にある時刻表に目をむけ、現在の時間と照らし合わせた。後5分でバスが来る、順調に来ていればの話だけど。都会は日によって交通の量が激しく変わり、バスが遅れるなんてことはよくあった。もしかしたら今日も遅れる可能性が無いわけでもない。

5分が辛い。むくんだ足をパンプスがきつく締め上げる。足の先は寒さで感覚がほとんどないが、手で触るとびっくりするほど冷たい

であろうことは想像にたやすい。足を休めるためにもベンチに腰を掛けたいが、この寒さの中、金属製のベンチに身も心も預ける気にはまるでなれなかった。

唯一の熱源であるカイロが手の中で私を暖めようと熱心に働いているが、どうにも頼りない。しかし、暖かいことには代わりはないので両手で揉むようにカイロで暖をとる。

この時間にバスに乗る人は少ない。道行く人は温かい格好をして家路を急ぐ人ばかりで、みなバス停の前を通り過ぎる。背中を丸めたとぼとぼと歩くサラリーマン風な人や、遅くまで遊んでいたのか制服姿で歩く女子高生など様々な人が居る。あんなに足を出して平気なのだろうか、女子高生を見て思ったが、私もちよつと前まであんな格好で闊歩していたことを思い出すと、ふと懐かしく感じた。高校を卒業して、すぐに私は都会の大手電話会社に就職した。周りのほとんどが大学へと行く中、私は就職への道を選んだのだ。同級生たちと会えなくなると寂しくも思ったが、いざ離れてみると言うほど寂しさを感じなかった。

みんなはどうなんだろう。私が居なくなつて寂しいとは思わないのだろうか。それとも、今頃みんなでキャンパスライフを楽しんでいる、もしかすると私のことなんてすっかり忘れてしまっているのかもしれない。そう思うと、ちよつとだけ悲しくなつた。

そんな事を思いながらバスを待っていると、やたらと薄着な女性が歩いてくるのが見えた。上にパーカーを羽織っているが前は閉じられることがなく、中にはノースリーブのシャツを着ているだけだった。下はジーンズをはいているが、ダメージジーンズというのだろうか、所々スカスカで見えるからに寒そうだ。頭には大げさなくらい大きなヘッドホンをつけている。

しかし、その人はまるで寒さなど感じないのか平然とした顔で歩みを進める。音楽を楽しむ余裕もあるようで、頭を小さく揺らしている。活発そうな顔立ちで私より年齢は上に見える。そんな風にじっくり観察していると、目があった。

ジロジロ見ていた私は、視線を外すのが一瞬遅れてしっかりと目を見てしまった。相手はちよつと驚いたような顔をしたが、別に怪訝な顔をするわけでもなく歩みを進めた。しかし気のせいだろうか、その足は私の所に向かつてきているように見える。

やばい、何か言われるかもしれない。

都会の人は気が短いイメージがある。だからというわけではないが、この時直感的にそう思った。

その女性は歩く速度を落とすことなく真つ直ぐに私の所まで来た。やっぱり何か言われる。頭にかけたヘッドホンを外し、こちらを見て一言

「こんにちは」

そう声をかけてきた。いきなり文句を言われるんじゃないかと思つた私は一瞬戸惑う、けれど直に気を取り直し自然を装って言葉を返す。

「あ、こんにちは」

緊張と寒さで、声がちよつとうわずつてしまい変な声になってしまった。そんな事は気にならないのか、それともそれを笑ったのか、につこりと笑顔を返してきた。

「バス待ち？」

「はい。なかなか次のバスが来なくて」

そういつてから自分で携帯へと視線を落とすと、すでに5分が過ぎていた。やはり混雑しているのだろうか。

「やつぱり。ここのバスよく遅れるんだよね。こんなに寒いのに参っちゃうでしょ」

「そうですね」

思わず無愛想な返事になってしまった。初対面の人と話を弾ませる、という芸当は私には難しい。昔からなのだ。

首にかけたヘッドホンから軽快な音楽が流れる。どこかで聞いたような曲だと思つた。邦楽だろうか。そもそも私は邦楽しか知らないのだけだ。

「その上その薄着じゃあ、子鹿みたいに震えるのも納得だよ。遠くから見てもわかるくらいに震えてたよ」

そう言つてカラカラと笑つた。この人なんて私より数段上の薄着（言い方が変だろうか）なのに、人のことを笑えるんだらうか。少なくとも私よりは寒いはずなのに。

「あの・・・あなたは寒くないんですか？」

「ん？あたしは寒くないんよ」

そういつて「ほら」というとその場で一回転する。そこで回る意味はよくわからなかったけれど、寒くないという事は本当らしい。少しはだけたパーカーの隙間を見ても、カイロのようなものは見当たらない。近年見るようになった塗るホッカイロでもつけているのか、それとも足元にカイロでも入れているのか、どちらにしたってその格好だと寒くないはずがない。

その人が動く事によつて生じた風でさえ、私は寒いというのに。

それから私をまじまじと見ると、こう言つてきた。

「ねえ、あたしが暖めてあげようか？」

言っている言葉は理解できたが、意味がよく汲み取れなかった。私を暖める、ということは私に暖をとらせてくれるという事だろうか。目の前にいるこの寒そうな女性（寒くないといつている）がしているような塗るホッカイロ的な物を分けてくれるのだろうか。分けてくれるとして、わざわざ私はそれを塗ろうとは思えない。

それにとり方によつては、その言い回しはまるでナンパの口説き文句の用にも聞こえる。つまり凄く、怪しい、という事だ。

私は咄嗟に口を開く。

「いえ、私もカイロはもっていますから、大丈夫です。」

そう言つて手を開いて差し出す。くしゃくしゃに揉みしだかれたカイロが手のひらでぐったりと横たわっている。そんな状態でもまだまだカイロとしては元気な用得、手のひらをほのかに暖め続ける。そんなカイロを見て、ちよつと困つたような顔でその人は笑つた。

「そんなのじゃ寒いでしょ。それに大丈夫な人は子鹿みたいに震え

ないんだって」

そう言つとそつと手を伸ばし、私の腕をつかむ。恐怖と驚きで思わずびくつと体が震えた。口はパクパクと開くが、驚きすぎて声にならない。

そのままもう片方の手を伸ばし、両手で私の左手を包み一言

「怖がらないで」

と囁いた。

そういわれても、と思う。頭は冷静に働いていないし、何かを言おうとしている口も声になっていない。そもそも何を言おうとしているのか私にもわからなかった。

そのまま顔を近づけると、ふうつと息を手に吹き込んだ。暖かい空気が丸められた手の中に広がり、それから腕をつたつて上ってきた。

「手は丸めたまま開かないで。大丈夫すぐに暖くなるから」

既に手は放されていて、私の手は自由になっている。

それから改めて気づく、手の暖かさが腕を伝つて上り、体に広がっていつている。既に周りの寒さは感じず、それどころかまるで暖房のついた部屋に居るような快適さだ。

「こ、これって・・・どうなつて」

「どう？暖かいでしょ？」

「あ、はい。暖かいですけど」

「よかったよかった。手を開けば元に戻るから、暖かい所に行くまではしっかりと握っておくんよ？」

「あ、えつと」

「それじゃ、気をつけて帰りなさいよ」

そついつて手を振ると、何も言えなくなっている私を置いてけぼりにして背中を見せる。首に下げたヘッドホンをあげて、耳に当てようとしたので慌てて叫んだ。

「あの！」

大きな声を出しすぎたかもしれない、一瞬周りの視線が私に集まる。



思わず恥ずかしくて、身を縮めてしまう。女の人もびっくりしたのが変な姿勢のまま固まっている。それから振り向く顔は予想通り驚いた表情をしていたが、構わず私は言葉を発した。

「ありがとうございます。あなたはいい……」

何なんですか？　そう言葉を続けるつもりだった。けれど、そう続けるより早くその人が口を開いた。

「あたしはね、ちょっとした魔法使いなんよ」

そう言っただけでさそうに頬をかくと、さつと前に向き直ってヘツドホンを耳にかけた。その後は振り返ることもなく歩いていった。私もあえて言葉をかけることはなかった。

「ちょっとした魔法使い……」

そう呟くと、私は自然と笑みをこぼす。変な人だった。

後ろ姿はもう見えない。入り組んだ都会の地形がそうさせたのだろうが、魔法使いなんていう言葉の所為で、まるで煙のように消えてしまったのではないかと私に想像させる。

そんな思考を中断させるように、ようやくバスが到着した。プシュツという音を立ててバスのドアが開く。降りる人はいなく、乗る人も私一人。バスの中もがらんとしており、どこか寒々とした雰囲気を感じたが、魔法使いのおかげで私の体も心も、ぽかぽかと暖かかった。

また明日会えるだろうか、あの魔法使いに。そう思うと、明日もまた寒くても悪くないなと思った。

再び音を立ててドアを閉じると、バスは静かに発進した。冬があけるには、まだまだ長い。そう思わせるような夜の出来事だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7253r/>

---

暖かい魔法

2011年10月8日22時46分発行